

掲載コンテンツ紹介

平成18年度に全国から応募されました地域文化資産映像を、審査委員会にて分野別・地域別を考慮し厳正なる審査を行いました結果、100本の地域映像が選定されました。

以下に100本の地域映像の概要をご紹介します。実際の映像は「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業ポータルサイト」にてご覧頂けます。

(平成19年1月31日までに合併予定の市町村については合併後の市町村名を記載しています)



北海道 まつまえまち 松前町 まつまえおきあげおんど 松前沖揚げ音頭 まつまえまち していむ けいみんそくぶん かざい 松前町指定無形民俗文化財

沖揚げ音頭とは、ニシン漁業に従事する漁業者たちによって唄われた作業唄です。ニシン漁の各作業ごとに唄があり、全体を総称して沖揚げ音頭といいます。

よく知られているソーラン節も沖揚げ音頭の中の一部ですが、歌詞は即興的に唄われるため無数にあるそうです。

沖揚げ音頭は、ニシン漁に大綱(定置網)の使用が一般化する幕末の頃、漁に従事する者たちによって自然発生的に生まれたものといわれ、力強い男性合唱です。



青森県 はちのへし 八戸市 えんぶり

八戸のえんぶりは、豊年祈願の民俗芸能で、毎年2月17日から4日間行われます。えんぶりの名称は、田を均(ナラ)す「枅(エブリ)」という農具からきたものと伝えられています。

太夫(タクウ)と呼ばれる舞手が、頭に烏帽子(エボシ)を被り、ジャンキと呼ばれる棒を地面に突き立てたり摺ったりするような所作が特徴で、動きがゆっくりとした「ながえんぶり」とテンポが速い「どうさいえんぶり」に分類されます。合間に「松の舞」「恵比寿舞」「大黒(ダイコク)舞」などの祝舞や子どもたちによる「エンコエンコ」と呼ばれる舞などもあります。

昭和54年に、国の重要無形民俗文化財に指定されています。



青森県 あおもりし 青森市 (旧浪岡町) なみおかまち 吉野田獅子踊 あおもりけん むけいみんそくぶん かざい 青森県無形民俗文化財

吉野田獅子踊(ヨシノダシシオドリ)は、青森県青森市浪岡(ナミオカ)西部の吉野田地区に伝わる獅子踊です。

由来は諸説ありますが、浪岡には室町時代南朝の雄、北畠(キタバタケ)氏が拠点としたとされる浪岡城跡があり、初代城主が築城の際に領内の平和・栄光・五穀豊穰を祈願するため、京都から「踊り手」を招き踊らせたのが始まりであるとする説が伝えられています。踊りは風流な「鹿獅子(シカジシ)」の形態で、鹿のように軽快な動作や足さばきが特徴です。

昔は神前で領内の社家等を招いて「神楽獅子」として3本の榊の枝を奉納し、旧正月2日、8月15日に踊ることが定例とされました。現在は獅子踊保存会が踊りの継承と普及活動を担い、吉野田地区にある十和田神社の大祭で踊りを奉納しています。



青森県 ひらかわし 平川市 (旧尾上町) おのえまち 八幡崎獅子踊 やはたざきしし おどり

約400年の歴史を持つ八幡崎獅子踊りは、旧暦8月1日の獅子起し、村の八幡宮への奉納から始まり、旧暦8月14日の県下獅子踊り大会に出場、旧暦8月16日に猿賀(サルカ)神社いざよい獅子奉納を控え、新暦6月から練習を始めます。その他に、養護施設の慰問や公共団体や任意団体等からの依頼を受けて出演するなどの活動を行っています。

八幡崎の獅子踊りは、「踊りと囃子」のきめ細かさとしズミカルさが特徴ですが、この踊りと囃子には楽譜等書面の記録がなかったため、正しい技芸の伝承を目的に、映像記録を計画しました。この記録映像には、代表的な踊り「宮ぼめの踊り」「参進(サンシン)の踊り」「庭ぼめの踊り」「橋ぼめの踊り」「山ぼめの踊り」の5つが、フル演技で収録されています。



岩手県 はなまきし 花巻市 かくら こうちゅう まち いき 神楽講 中の待つ地域へ はなまき こうだ かくら いわて花巻の幸田神楽

「九日神楽(コノカカグラ)」は、講中神楽または神楽講ともいわれ、かつては広く行われていた神楽の廻村の一般的な形態でした。しかし、時代の流れとともに神楽上演が祭礼やイベント中心となる中、神楽講は激減していきました。

「幸田神楽(コウダカグラ)」の神楽講も、昭和30年代には13講中を回っていましたが、現在は3講中のみとなり、中には休止を考えている講中もあります。

この記録は、高齢の宿主たちの熱意によってかろうじて支えられている講中神楽の現状と、地域の人々が講中神楽に寄せる思いを伝え、また、幸田神楽の地道な伝承活動を追いながら、講中神楽の意義と展望を模索しているものです。



岩手県 たきざわむら 滝沢村 たきざわむら きょうどげいのう 滝沢村の郷土芸能 いわてさん ひび ふえだいて ～岩手山に響く笛太鼓～

岩手の最高峰岩手山(イワテサン)は、いにしえから祈りの対象として崇められてきました。

篠木神楽(シノギカグラ)と川前神楽(カワマエカグラ)は、岩手山信仰に依拠して、山麓の神社を拠点に広い範囲で活動してきました。娯楽の乏しかった時代、地域の人々は、祭や春祈禱に訪れる神楽を楽しみにしていました。

この映像では、篠木神楽と川前神楽はどのような芸能なのか、1年間の活動取材と保存会の方々のインタビューを交え、それぞれの演目ごとに特徴を分かりやすく解説しています。また、大沢田植踊り(オオサワウエオドリ)や滝沢駒踊り(タキザワコマオドリ)など、村内に伝わる他の郷土芸能の活動も紹介しています。



宮城県 仙台市 仙台的柳生和紙と松川達磨

柳生和紙は、仙台で育まれた手漉きの紙です。仙台市太白区の柳生一帯で生産され、近世の初め、伊達政宗に呼び寄せられた伊達郡(福島県)の紙漉職人が始めたといわれています。
楮の皮から取り出した繊維に黄蜀葵(トロロアオイ)の根の汁を加えて漉いた丈夫な紙は、提灯や障子紙、包装紙など、日常の中のさまざまな道具に用いられ、豊かな色彩と手の込んだ飾りつけで知られる松川達磨の素材としても使われてきました。元祖の職人の姓より名をついた、この達磨は歳の市などで販売され、仙台の正月には欠かせない風物詩といえるでしょう。
映像では、紙漉きから達磨づくりへと受け渡される手わざの流れや、技術の継承と保存に向けた最近の取り組みなどを紹介していきます。



宮城県 石巻市(旧桃生町) “ふれあい祭”はねこ踊り フェスティバル in 桃生

「ふれあい祭」はねこ踊りフェスティバル in 桃生は、毎年9月の第2土曜日に開催されます。約1000人の踊り手が乱舞し、桃生地区の人口を超える2万人以上の観客が訪れます。
はねこ踊りは、打ち囃子(ウチバヤシ)、献囃子(ケンバヤシ)、馬鹿囃子(バカバヤシ)の3つの囃子によって踊られる、全国に類を見ない豊年踊りです。この「はねこ踊り」は、地域の伝統行事として位置づけられ、市の活性化や地域間交流の促進に貢献しています。
映像は、祭本部前を乱舞する「はねこ踊り保存会」のメンバーです。



宮城県 石巻市 サン・ファン・パウティスタ号 21世紀への旅立ち ~建造の記録~

サン・ファン・パウティスタは、仙台藩主伊達政宗(ダテマサムネ)によって建造され、慶長18年9月15日(1613年10月28日)、藩士支倉常長(ハセクラツネナガ)ら一行180余名を乗せて月浦(ツキノウラ)(現宮城県石巻市)から出帆した黒船の復元船です。
この船は、日本で建造された木造洋式帆船として初めて太平洋を2往復し、その造船技術は当時の世界トップレベルにあったと高く評価されています。



秋田県 北秋田市(旧阿仁町) 重要無形民俗文化財指定 根子番楽

「番楽」は、かつて修験道の山伏たちによって行われていた神楽ですが、根子番楽(ネッコバンガク)は、古くから源平合戦の遺臣または落人が当地に伝えたものとの言い伝えがあり、現在の伝承に至っています。
毎年8月14日に公開されているこの番楽は、東北地方各地に伝わる山伏神楽の中にあって、歌詞の内容が文学的に優れていること、舞いの形式が能楽の先駆をなす幸若舞(コウワカマイ)に類似する要素があることから賞賛され、古式を現代によく残している能楽のひとつであると関係各界から注目されてきました。
勇壮活発な武士舞いと古雅で静かな古典的舞いの2つに大別され、平成16年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。



秋田県 男鹿市 重要無形民俗文化財 東湖八坂神社祭のトウニン行事

東湖(トウコ)八坂神社祭のトウニン(統人)行事は、男鹿市船越と湯上市(カタガミシ)天王本郷および近隣の6集落からの統人制で執行される行事です。7月7日(船越)、7月8日(天王)の新統人お竹受けに始まり、翌年7月8日の注連(シメ)納めまでの間、年間を通じて豊かな諸行事が継承されています。
本祭は7月7日で、天王・船越を巡幸する神輿が八竜橋(ハチリュウバシ)の中央にさしかかる頃、船越側からは真赤な装束でヤマタノオロチに扮した「くも舞人(マイニン)」が、天王側からはスサノオノミコトとしての神格を得た「牛乗り人」が登場します。
「八俣(ヤマタ)の大蛇退治」の故事と八郎淵周辺の農漁民に伝わる水神信仰とを習合(シュウゴウ)した行事で、昭和61年1月、国指定の重要無形民俗文化財に指定されました。



秋田県 大仙市(旧仙北町) 仙北町指定無形民俗文化財 堀見内ささら

堀見内ささらは、慶長7(1602)年の佐竹入部以前から堀見内地区に伝えられているといわれ、田畑の病害虫を払い、五穀豊穡を祈り、病魔を駆逐し、家内安全を願う舞であると伝えられています。
ささらは獅子舞を中心としていますが、踊り場までは「駿渡(ナデワタ)り」という古風な習わしがあり、今日に大変よく伝えられています。
松明やボンボリ、鐘にて猛獣の害に備えながら悪魔を追い払い、独り立ち獅子舞が3頭で、耕作地に害をなす鳥獣や農民の命を奪う流行病、病原菌を退治するものです。これに神様・ササスリ・唐団扇(トウウチワ)・鎌・棒使い・大太鼓・歌いあげ・笛吹きが同行して踊り場まで行列し、五穀豊穡・疫病退散を祈願します。



山形県 新庄市 250年の伝統と歴史 新庄まつり行事

新庄まつりが平成17年で250年目を迎えることを記念して、歴史の変遷と祭り行事全般の伝統芸能・技術を映像で後世に伝えること、また、新庄まつりの素晴らしさを市内外に広くアピールすることを目的としてビデオを制作しました。
内容は、祭りの準備にかかわる人々の技法等を各セクション(山車(ヤタイ)製作・人形製作・衣装製作・囃子稽古・鹿子踊(シシオドリ)練習)に分けて収録・編集し、後世に受け継がれるものとししました。祭り当日についても、21台の山車パレード・神輿渡御行列(ミコシトギョギョウレツ)・鹿子踊等、各日の行事状況が分かるよう、収録・編集を行いました。



山形県 白鷹町 山形県指定無形文化財 深山和紙

山形県指定無形文化財の深山(ミヤマ)和紙は、古くからの伝統技法によって漉(ス)かれる貴重な文化遺産ですが、現在、和紙漉き職人は今(コン)さんただ一人となっています。
和紙漉きは1年を通して行われ、和紙の原料となる楮(コウゾ)の手入れ作業から始まり、楮刈(コウゾカリ)、楮ひき、楮ねり、紙打ち、紙漉き、紙つけ…と続きます。この間にも和紙を漉き上げるための緻密な作業は多種多様にわたります。また、雪国白鷹の大自然が生み出す力も、柔らかくあたたかい和紙を作るためには不可欠といえるでしょう。
これは、深山和紙を人形作りに生かす谷口さんとの対談風景も交えながら、年間の作業工程を追って映像として収録した作品です。



福島県 ^{あいづ みさとまち} 会津美里町 (旧会津高田町) ^{あいづただい さす みじんじや} 会津高田伊佐須美神社の ^{たうえしんじ} 田植神事

会津盆地の西南、会津美里町に鎮座する伊佐須美(イサスミ)神社は、「延喜式」にも載る名神大社で奥州二宮の格式を有し、「会津」という地名発祥の伝承がある社です。
この古社に伝わる田植神事は、福島県指定の重要無形民俗文化財でもあり、現在は「御田植祭」として催されています。お祭は毎年7月11日、12日に行われ、伊勢の朝田植、熱田の夕田植、高田の昼田植などと並び称されています。催馬楽(サイバラ)や獅子追い、田植人形など古い要素を残しており、会津の稲作文化を今に伝える貴重な神事です。



福島県 ^{なみえまち} 浪江町 ^{なかじま つるぎまい} 中島の剣舞

古老の口伝によれば、天保の頃上方からの修験者(シュゲンジャ)より伝を受け、村鎮守・東照権現様の祭祇の際、奉納舞として神楽と共に伝えられてきたのが「中島の剣舞」だと云います。
記録には嘉永6年(1853)の早魁(カンバツ)の年には北標葉郷(キタシネハゴウ)あげての雨乞いが行われ、室原(ムロハラ)の滝や大聖寺(ダイショウジ)等において神楽と剣舞が奉納されたとあります。
また、立野村(タツノムラ)においては、安政5年(1858)より、至誠霊神(シカンレイシン)を祭る村祈禱が旧正月12日に行われるようになり、立野下・中・上の神楽と共に剣舞も奉納されて受け継がれてきたものです。



福島県 ^{ひのえまたむら} 檜枝岐村 ^{ひのえまたかぶき} 檜枝岐歌舞伎 ^{ときこ} 時を越える ^{ゆうげん} 幽玄の美

檜枝岐(ヒノエマタ)歌舞伎の起源は、江戸時代にさかのぼります。江戸の中期、寛政・文化時代から260年以上の歴史を持つ農民芸能は、先祖が伊勢神宮へ参拝した折に江戸で歌舞伎の歌舞伎を観劇し、見よう見まねで村に伝えたとされ、今日まで父から子へ、子から孫へと継承されてきました。檜枝岐歌舞伎には、江戸の華であった歌舞伎そのものの姿、浄瑠璃が息づいているのです。
毎年5月12日の「愛宕神祭礼」、8月18日の「鎮守神祭礼」に、鎮守神境内にある舞台(舞殿(マイデン))で村の神に奉納する形で歌舞伎が上演されます。この歌舞伎は県の重要無形文化財、舞台は国の重要有形文化財に指定されています。



茨城県 ^{なめがたし} 行方市 (旧玉造町) ^{ひたちこうや} 一常陸高野に響く ^{ひび} 西蓮寺節 ^{さいれんじぶし} 西蓮寺 ^{さいれんじ} 常行 ^{じょうぎょう} 三昧会

西蓮寺の伝統行事である「常行三昧会(ジョウギョウサンマイエ)」は、寛治年間(1087年~94年)に地元の長者が比叡山より移したものとされ、西蓮寺の末寺、問徒寺(モンツジ)の僧侶が常行堂に集まり、9月24日から30日までの七日七夜にわたって堂内を廻りながら独特の節回しで立行誦経(ドクキョウ)する大法要です。初日、中日、末日には、境内で学頭寺(ガクトウジ)の名残を彷彿(ホウフツ)とさせる雅な籠(カゴ)行列がみられます。
また、「常陸高野(ヒタチコウヤ)」と呼ばれるように、この法要には、「仏立て」として宗旨の別なく近郷近在はもとより遠隔地からも新仏の供養に参拝人が訪れることでも知られています。今でもこの期間は門前に市が立ち、賑わいます。



茨城県 ^{いしおかし} 石岡市 ^{そめや} 染谷の十二座神楽 ^{いしおかし} 石岡市 ^{さしのじんじや} 佐志能神社

「十二座神楽」は関東地方で盛んに行われていた里神楽(サトガクラ)のひとつで、毎年4月19日に染谷(ソメヤ)の佐志能神社(サシノジンジャ)に奉納されます。太鼓・鼓・笛・鈴が使用され、演者はそれぞれに扮装(キラ)を凝らし、巫女(ミコ)の舞以外は仮面をかぶって、無言の所作で表現します。全体の構成は、第一座「猿田彦(サルタヒコ)の舞」から始まり、第二座「矢大人(ヤダイジン)」、第三座「長刀(ナギナタ)つかい」、第四座「剣(ツルギ)の舞」、第五座「豆まき」、第六座「狐の田うない」、第七座「種まき」、第八座「巫女(ミコ)の舞」、第九座「鬼の餅まき」、第十座「みきの舞」、第十一座「えびすの舞」、第十二座「天の岩戸」で大団円となります。
この神楽で使用される面は、石岡市の有形民俗文化財に指定されています。



栃木県 ^{かぬまし} 鹿沼市 (旧粟野町) ^{あわのまち} 粟野町の伝統芸能

この映像は、粟野町に伝わる4つの指定無形民俗文化財を記録紹介するものです。
「日渡路(ヒドロ)の神田(カンダ)踊り」は大杉神社の祭礼に奉納される踊りで、この地に嫁いだ女性がこれを習う慣習により保存されてきました。浴衣にたすき掛けて両手に花笠を持った女性が「神田」の轆子にあわせ、ゆっくりと優雅に踊ります。
他の3つは、それぞれ入粟野(イリアワノ)の賀蘇山(ガソヤマ)神社、上永野(カミナガノ)の尾出山(オデヤマ)神社、久野の小松神社の祭礼で舞われる獅子舞です。風流系獅子舞は、特に関東地方を中心とした東日本に広く分布し、一人の人間が一つの獅子頭をかぶり一匹の獅子となる「一人立」の三人一組からなる獅子舞です。



栃木県 ^{かみかわ} 上河内町 ^{てんか} 天下一関白神獅子舞

栃木県無形民俗文化財の「天下一関白神獅子舞」は、県下に広く分布する関白流獅子舞の始祖とされ、約1100年の歴史を持つ伝統ある祭りです。毎年8月第1土曜日に、地元保存会により実施されます。
この獅子舞は、平安時代に藤原利仁(フジワラトシヒト)が倒れ急逝したおり、荒天のために葬儀ができず、天・地・人の3対の麒麟の頭を刻んだ「御神獅子(オンカミシシ)」をかぶらせて舞を舞ったところ晴天になったという伝説が由来で、伝承によれば912(延喜12)年から今日まで続いています。
境内に9尺四方のしめ縄をはり、中に初殺をまいて作られた舞台で、雄獅子2匹、雌獅子1匹が舞います。獅子舞の演目は、子どもたちの神詣りから始まり「平庭(ヒラニワ)」「時寄(マキヨセ)」「唐土(トウド)の舞」「弓くぐり」「四方固め」「芝隠し」「獅子舞(鬼退治)」の7庭です。獅子舞は鬼退治の舞ともいわれ、かなり劇的な構成を持っており、関白獅子舞のみが演ずる独特なもので、県内の他の系統の獅子舞には見当たらないものです。



群馬県 ^{まえばし} 前橋市 ^{まえばし} 前橋市指定 ^し 重要無形民俗文化財 ^{まえばしとびでんとうぶん} 前橋鳶伝統文化保存会 ^{かすいかい} 華粋会 ^{まえばしとびきや} 前橋鳶木遣り・^{まといふ} 纏振り・^{はしご} 梯子乗り

前橋市指定重要無形文化財の前橋鳶木遣り(マエバシトビキヤリ)・纏振り(マトイフリ)・梯子乗り(ハシゴノリ)で唄われる木遣りは、建築用材の太木を運ぶような力仕事を効率よく、かつ安全に進めるための合図として工夫された日本独特の作業唄です。
行われる作業の種類によって木遣りは2つに分けられます。そのうち、鳶の木遣りは、建築物の基礎を固める作業に唄われました。しかし、建設機械の発達により、木遣り・纏振り・梯子乗りが一体化したものとなりました。
現在では、出初め式や初市まつり、橋の渡り初め、落成式等の祭事や慶事において披露されています。



群馬県 藤岡市 三嶋様の夜祭 藤岡市指定重要文化財

三嶋神社は、室町時代の関東管領上杉顕定(カントウカンレイウエスギアキサダ)が伊豆の三嶋大社から分祀し、平井城(ヒライジョウ)の氏神として祀ったと伝えられています。祭神は大山祇命(オオヤマツミノカミ)で、近年では結婚の神様ともいわれています。

11月15日に行われる秋季大祭の前夜祭には、夜祭りが行われます。14日の午前中、御神体を乗せた神輿が本社(下ノ宮)から約1km離れた別殿(上ノ宮)へ静かに渡御し、奥の院に安置されます。午後9時半頃、神輿を中心に行列を組んで本社に渡御します。この時、祭りは最高潮になり、警人が群がる人々を押し返しながらいり立ちは静かに練っていきます。

現在、この祭りは藤岡市重要民俗文化財に指定されています。



群馬県 玉村町 樋越神明宮の春鍬祭 一国指定重要無形民俗文化財

樋越神明宮(ヒゴシシンメイグウ)の春鍬祭(ハルクワマツリ)は、寛政10(1798)年には、すでに行われていたようです。この祭りは、その年の豊作を予祝して行う田遊びの神事で、毎年2月11日に神明宮で行われます。

神明宮の拝殿で祭典が行われた後、榊や榎の枝に餅をつけ、鍬に見立てたものを持った「鍬持(クワモチ)」が拝殿の前で群塗(クロヌリ)の仕草などをし、祭典長の禰宜(ネギ)が頌詞を見て「春鍬よーし」と叫ぶと、一同が「いつも、いつも、もも世よーし」と唱和します。これを3回繰り返すと持っていた鍬を投げ、観衆が鍬を奪い合います。取った鍬を家に飾っておくと養蚕があたり、稲穂を拾った人の家は豊作間違いなしといわれています。

春鍬祭は、平成14年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。



群馬県 板倉町 山口大杉囃子

大杉囃子は、いつ頃から始まったのかわかりませんが、古老の口承によると「昔、疫病が流行し、通り耕地から御輿を借りて揉んだところ疫病が治まったので、通り耕地から譲り受けて行われるようになった」とのことです。

山口大杉神社に伝わるこのお囃子は、練り風流に属し、神迎え、神送りのために御輿とお囃子によって鎮魂を行うものです。御輿に合わせて演じられ、曲目も多く、勇壮かつ軽快なテンポが特徴です。

大杉神社の信仰は水神を祀るもので、利根川、渡良瀬川(ワタラセガワ)等の船運に関する水の難防止、疱瘡(ホウソウ)防止、豊漁に加えて豊稔祈願信仰でもあります。



埼玉県 羽生市 羽生のささら獅子舞

羽生市域では、かつては10を超える地域で民俗芸能である獅子舞が行われていました。しかし社会情勢の変化等による地域コミュニティの喪失から衰退の一途をたどり、存続がきわめて危うい状態で、現在ではわずか4地区のものが実見できるにすぎません。そこで、これらの貴重な芸能を市の無形民俗文化財に指定して保護に努めており、その一環として映像記録も制作し、芸態の保存と啓発を図っています。

当映像は、獅子舞そのものの姿を紹介するとともに、それを支える人々にも光を当て、地域で守るべきものとして訴えているのが特徴です。尾崎(オサキ)、上村君(カミムラキミ)、下手子林(シモテコバヤシ)、桑崎(クワサキ)の各地区からの出演で、おのおの違う演目を行っています。さらに各代表へのインタビューからは、今後の課題もうかがえます。



埼玉県 ふじみ野市(旧大井町) 大井町の箒職人

このビデオでは、ふじみ野市の大井地区市沢(イッサワ)(旧大井町)の箒職人により作られる「おおい箒」について紹介しています。

おおい箒は、江戸時代の文化・文政期から昭和の半ば頃まで、当地で盛んに作られていました。史料によると、昭和初期の全盛期には、50軒ほどの箒屋があったということです。当地で箒作りが盛んに行われた背景には、箒作りが専門的技術を要するもので、農家の次男・三男の生業となったこと、材料となる箒草の栽培に適していたことが要因として挙げられます。

ビデオでは、箒草の栽培・収穫から箒職人の手による箒の製造工程までを紹介しています。ビデオを通して、職人の高度な技術を知るとともに、職人同士の競争心や兄弟弟子の間柄など、職人の世界や心意気を感じることができます。



千葉県 館山市 茂名の歳時記 ～里芋祭り～

千葉県館山市の内陸部に、茂名(モナ)の集落があります。この約30戸の小さな農村には、昔から行われてきた「里芋まつり」(重要無形民俗文化財)が今も伝えられています。これは、里芋を独特の形に積み上げたお供え物を、行列を作って十二所神社へと奉納する祭りです。

祭りで使う茂名芋は、集落の各家が2軒ずつ「積番仲間(ツミバンナカマ)」を組んで、1年間大切に育てます。

里芋まつりという独特の行事が、今日までの長い間どのようにして続いてきたのか。その手がかりを追いながら、1年のさまざまな場面で作物の収穫を祈り、祝いながら過ごす茂名の人たちの暮らしぶりを紹介します。



千葉県 八千代市 悪魔を払う子どもたち 吉橋の大杉サマと桑納の春ギトウ

ここで紹介する民俗行事は、子どもが主役で行われる重要な行事です。よく「7歳までは神のうち」「7つ前は神の子」といわれるように、神から人への過渡期である子どもは、神と接することのできる特別な力を持っているとされてきました。行事は、その力を活用して悪疫を払うと同時に、地域社会において子どもたちが重要な構成員となった証にもなります。

地域では、一人ひとりの役割が決まり、これまで行事が運営・継承されてきましたが、今後の継続が困難になってきました。そのため、現状を記録保存して、子どもたちが行事に参加できる環境の保持に努め、また周囲の理解を求めることで、行事がいつまでも継続される体制を作りたいと考えます。



東京都 足立区 花畑大鷲神社獅子舞

花畑の獅子舞は、足立区旧花又(ハナマタ)村に伝わる一人立ち三頭獅子舞です。祈禱獅子舞ともいわれ、「天下泰平」、「五穀豊穡」、そして「悪疫退散」を祈るものとされています。

獅子舞が行われるのは、かつては7月15日で、夏に流行する疫病などを払う悪疫払いの意味が強い獅子舞と考えられます。流行病が出たときなどは、村周りの獅子舞も行われたといわれます。現在は、7月第3日曜日に大鷲(オオトリ)神社境内の舞い庭で奉納されています。

三頭の獅子は母獅子(カカジシ)、中獅子(ナカジシ)、大獅子(オオジシ)の親子の獅子といわれ、岡崎・幣(ヒ)掛かり・橋渡り・綱渡り・花隠し・口掛け・出入り、の7つの舞の中で、それぞれの所作を行います。



東京都 ^{むさしのし}武蔵野市 ^{むさしのし}武蔵野市の郷土芸能 ^{きょうどげいのう}無形文化財 ^{むけいぶんかざい}むさしのばやし

むさしのばやしは聞き伝えによると、文久2(1862)年、武蔵野八幡神社のお祭りを賑やかにするため、吉祥寺村を中心に生まれたといわれ、代々「吉祥寺はやし連中」により伝承されてきました。楽器は、大太鼓1、小太鼓2、鉦(カネ)1、笛1で構成されており、6つの組曲で構成されています。

武蔵野市では、むさしのばやしを伝統芸能として保存することを決め、昭和46年4月6日武蔵野市指定無形民俗文化財に指定しました。(平成17年4月1日、武蔵野市文化財保護条例改正より市技芸から武蔵野市指定無形民俗文化財に変更)



神奈川県 ^{かわさきし}川崎市 ^{かわさき}川崎の大山信仰 ^{おおやましんこう}

伊勢原市にある大山は、古くから霊山として信仰を集めてきました。

大山は、明治元年に「神仏分離令」が公布されるまでは、山頂に石尊大権現(セキソノダイゴンゲン)を祀り、中腹に不動明王を本尊とする大山寺が開かれた神仏混淆の山でした。また、大山は平野部を潤す水源として、別名雨降り山とも呼ばれ、雨乞いの信仰を集めてきました。

江戸時代に入ると、大山詣での庶民信仰が盛んになり、川崎市域にも数多くの大山講が組織されました。

この映像記録は、現在も川崎市域に残る大山講の活動を通して、現代社会における人々の大山信仰のありようを描いています。



神奈川県 ^{やまとし}大和市 ^{かみわ}上和田薬王院 ^{そうばんねんぶつ}双盤念仏

大和市上和田信法寺(シンボウジ)の別院薬王院(ヤクオウイン)では、毎年9月8日の縁日に双盤念仏(ソウバンネンブツ)が行われます。無病息災・家運隆昌のご利益があり、昔は農耕行事の虫送りや風祭り、雹(ヒョウ)祭りにも唱えて、五穀豊穡を祈願しました。

薬王院双盤念仏は、浄土宗関東総本山の鎌倉光明寺(コウミョウジ)の系統を引き、現存する鉦(カネ)の銘から享保元(1716)年にはすでに行われていたことが分かっています。念仏の中にはすでに途絶えてしまったものもありますが、祭りの時に叩く「平鉦(ヒラガネ)」や、本尊の回向(エコウ)の時の「回向鉦(エコウガネ)」は、薬王院双盤念仏保存会によって現在に伝承されています。

保存会による念仏を紹介し、後世への継承を願う作品です。



神奈川県 ^{おおいそまち}大磯町 ^{にしこいそ}西小磯の七夕 ^{たなばた}

七夕行事は牽牛(ケンギウ)・織女の伝承に由来する星祭りとして一般的に認識されていますが、当行事は盆を迎える前にケガレを祓ったり、降雨を祈る農耕儀礼的な性格をもつことが特徴です。日本の七夕行事や民間信仰の要素を理解する上で貴重であることや地域的特色が豊かであることが認められ、平成14年に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されました。

本記録は平成15年度地域伝統芸術等保存事業(財団法人地域創造・財団法人市町村振興協会助成事業)として作成したものです。西小磯東(ニシコイソヒガシ)地区と西小磯西(ニシコイソニシ)地区それぞれの七夕行事を、記録性やエンターテインメント性を踏まえながら、西地区の七夕行事の特徴をとらえて編集しています。



新潟県 ^{かしわぎし}柏崎市 ^{やま}山に舞う ^{あやこまい}綾子舞への誘い ^{さそ}

綾子舞(アヤコマイ)を紹介する映像と解説です。

綾子舞は、女谷(オナダニ)の高原田(タカンダ)と下野(シモノ)の2つの地区に伝承されてきた民俗芸能です。初期の歌舞伎踊りの面影を今に伝え、踊り・囃子舞・狂言で構成されています。座元(ザモト)の家で、地区の秘密として長男から長男へと伝えられてきました。

映像では、2つの地区に伝わる衣装の相違点と共通するユライと呼ばれる赤い被り物などの特徴、それぞれに伝わる囃子に使われる楽器の構成・笛の調子などの相違点について解説し、さらに伝承者養成講座、小中学校での伝承学習など現代における伝承の取り組みについても紹介しています。



新潟県 ^{いといがわし}糸魚川市(旧青海町) ^{おうみ}青海の竹のからかい ^{たけ}

「青海の竹のからかい」は、江戸時代から続いているといわれる正月行事です。

この行事は東西2地区に分かれて行われ、7日のお松とりから始まります。飾り竹や2本の竹(勇み竹、合わせ竹)をめぐり、相争って豊作豊年を占います。15日に行われる、竹をからませ引きあう勇み竹、合わせ竹は、威勢のよい若者衆で賑わい、子どもや老人も夢中になって参加して、観衆も熱い声援を送ります。

かつては同じような正月行事が全国に数例あったといわれますが、今は糸魚川市青海に残っているだけで、昭和62年12月28日に国の重要無形民俗文化財の指定を受けています。



新潟県 ^{いといがわし}糸魚川市 ^{しんぜん}神前に舞う ^{あまつじんじやはる}糸魚川市・天津神社春の大祭 ^{たいさい}

毎年4月10、11日の天津神社(アマツジンジャ)春季大祭に奉納される天津神社舞楽(国重文)は、糸魚川市一の宮に古くから伝承されてきた舞楽です。

起源等は定かではありませんが、能生(ノウ)白山神社の舞楽と同様、約500年前に大阪四天王寺から伝わったとされ、この地で独特の舞楽を形成したものと考えられています。

舞は振鈴(エンフ)・安摩(アマ)・鶏冠(ケイカン)・抜頭(バトウ)・破魔弓(ハマユミ)・児納曾利(チゴナソリ)・能抜頭(ノウバトウ)・華籠(ケコ)・大納曾利(オオナソリ)・太平楽(タイヘイラク)・久宝楽(キウホウラク)・陸王(リョウオウ)の12曲から構成され、俗に「稚児の舞」とも呼ばれています。

春季大祭では、舞に先立ち、2つの地区が神輿をぶつ合って豊漁豊作を祈る「けんか祭り」も行われ、勇壮な「動」から華麗な「静」へと、2つの世界を味わうことができます。



富山県 ^{となみし}砺波市 ^{でまちこどもかぶ}出町子供歌舞伎曳山祭り ^{ちいきこども}～地域と子供 ^{ぶたいうら}その舞台裏～

4月16日、17日の出町神明宮の春祭りに、曳山の上で子供歌舞伎が演じられます。外題(ゲダイ)は、絵本太功記尼ヶ崎の段(エホンタイコウキアマガサキノダン)・鎌倉三代記三浦別れの段(カマクラサンダイキミウラワカレノダン)・本朝二十四孝十種香の段(ホンチャウニジユシコウジュッシュコウノダン)・奥州安達原袖萩祭文の段(オウシュウアダチガハラソデハギサイモンノダン)・鬼一法眼三略巻菊畑の段(キイチホウゲンサンリヤクノマキキクバタケノダン)などのうちから2、3題が選ばれます。

曳山は東、中、西の3本があり、一番古いものは天明9(1789)年に始まっています。西町曳山では、明治中期まで本格的な人形浄瑠璃が上演され、その人形は現在も保存されています。

子供歌舞伎は、昭和42年10月6日に「子ども歌舞伎曳山行事」として市指定無形民俗文化財に指定されましたが、平成6年2月24日付で県指定文化財となりました。



富山県 おやべし 小矢部市 がんねんぼうおどり 願念坊踊

願念坊踊りは、9月3日小矢部市綾子(オヤベシアヤコ)の太田神社の秋例祭で奉納されます。踊りの起源は奈良時代にさかのぼり、仏教の布教に伴って始まったとされています。踊りが当地に伝わったのは天正年間といわれており、織田信長と石山本願寺との戦い(石山合戦)の講和が成立した際、長い間戦いに苦しんでいた門信徒たちが乱舞した様子を、市域から戦いに参加した者が帰郷とともに踊り伝えたということです。黒染めの法衣を身にまとい、棒に「願年坊」「天下泰平」「豊年万作」と書かれた行灯がついた「ダシ」を持ち、その後ろで同じ法衣を着た坊主たちが尺八、三味線などの楽器に合わせて踊ります。



石川県 かがし 加賀市(旧山中町) やまなか しっき 山中漆器と これたかしんのう 惟喬親王

この記録では、東山(ヒガシヤマ)神社の由来や真砂(マナゴ)と惟喬(コレタカ)親王のつながり、惟喬親王が木地屋祖神(キジャソシン)となったいきさつ(滋賀県永源寺町(エイゲンジチョウ)小椋谷(オグラダニ)の筒井八幡(ツツイハチマン)神社での地元住民などへのインタビューなど)を収録しています。また、全国各地の惟喬親王を尊崇する地域でのインタビューなどを通して、山中漆器の轆轤(ロクロ)技術のすばらしさ、類を見ない高度な加飾挽き(カシヨクビキ)(千筋(センスジ)・遊環(ユウカン)技法)などを伝えていきます。この記録を見て、町民に生産量全国一の漆器産地としての誇りを再確認してもらうとともに、子どもたちに地場産業について正しい知識を得てほしいと考えています。



石川県 かがし 加賀市 ごんがんしんじ 御願神事 しんしゅん つ 新春を告げる かが きさい 加賀の奇祭

御願神事は、菅生石部神社(スゴウイソベジンジャ)で毎年2月10日に行われています。伝承によると、この地に大蛇が住んでいて、これを退治するために生まれた神事であるとされています。祭が近づくと、大蛇になぞらえた大縄を作り、青竹が約200本用意されます。神事では、白装束の青年たちが青竹を手に境内になだれ込み、石段や石畳にたたきつけて手にした青竹を割り尽くします。青竹がほとんど割られた頃に、青年たちは大蛇を拝殿から引き出し橋の上から大聖寺川へと投げ込んで、神事は終わります。割られた青竹は、見物人が自由に持ち帰ることができます。この青竹で凧を作ればよく揚がり、簀にすれば歯の痛みが止まると伝えられています。



福井県 さかい し 坂井市(旧三国町) ひ たいこ 火の太鼓 みくにちよう していむけいぶんか ざい 三国町指定無形文化財

火の太鼓は、坂井市三国町夕見地区の金比羅神社に航海安全を祈願した神事の際、打ち鳴らされたことが起源であると伝えられています。祈願の時、まず神前に火を焚き、祈りを捧げてバチをとることが、火の太鼓という名称の所以です。神社の祭礼では、竹田川より港口に向かって船による神輿の渡御(トギョウ)がありますが、この時、船中で太鼓を奉納します。通常の打ち方とは逆の、打者が太鼓の左に立って打つ「左打ち」が特徴で、他にあまり類を見ません。



福井県 さかい し 坂井市(旧丸岡町) ひょうこ こめ 表児の米

表児の米は、坂井市丸岡町北横地の布久漏(フクロ)神社に伝わる神事です。布久漏神社は式内社(シキナイシャ)で、応神天皇、神功皇后と継体天皇の皇女円弥媛(マルヤヒメ)を祀っています。この神事の起源については、円弥媛の用水に対する尽力に感謝し糞米(サイマイ)を集めたことに始まるなど、いくつかの伝説があります。9月14日の宵、禪姿となった地区の男衆と男児らが表児の米会館に集まり、太鼓の囃しに合わせて歌いながら、肩を組み輪になって「おたしより」という行事を行います。続いて、各家から奉納されたお初穂米(ハツホマイ)を臼に入れ、「今搗(イマカ)つ米は、百姓の涙米…」と歌いながら搗きあげる米搗ちが始まり、清水でとぎ、セイロで蒸して神前に供えます。残りは、ボール状に丸めて参詣の人々に貰(ミ)でまきます。



山梨県 みのぶちよう 身延町(旧中富町) にしじま かぐら 西島神楽

「西島神楽」は、約400年前、甲斐武田氏の滅亡の頃、打ち続く戦禍と富士川の氾濫に悲しみ沈む里人の心を奮い起こし霊鎮め(ミタマシズメ)をしようと、神主によって始められたと伝えられます。出雲神楽の流れをくみ、17座の神楽、20曲の囃子(ハヤシ)により演出されます。毎年5月5日、天照皇大神宮の例祭で沢奥(サオキ)地区に設けられた特設舞台で奉納される清め祓い祈禱の舞である「御反閉(ゴヘンペイ)」、古事記神話に因む「天の岩戸の儀」、収穫の喜びを表現するユーモラスな「御大漁(ゴタイリョウ)の儀」などをとりあげたのが本映像です。また、小学生による神楽囃子および巫女の舞などの神楽、さらには小正月の行事として新婚・新築などの家で行われ道祖神祭に奉納される獅子舞も紹介しています。



山梨県 ほくと し 北杜市(旧長坂町) ながさかちよう 長坂町の稚児(巫女)の舞 わかみややはちまんたいじんじや 若宮八幡大神社の でんとうぎようし 伝統行事

稚児の舞は、毎年8月14日の夜、10歳になった氏子の中の少女らによって奉納される舞で、第一番「御幣(ゴヘイ)と鈴の舞」、第二番「剣と鈴の舞」、第三番「弓の舞」からなっています。村人たちが疫病(エキビョウ)や災害から守り、健康で平和な生活を営むことができることに、神に祈りを捧げる舞です。清純な少女たちが舞の奉仕者となったのは、少女たちが健康に成人し、やがてよい嫁、よい母になるようにという祈りが込められているからです。この舞は、長坂町長坂下条地区にある若宮八幡大神社(ワカミヤハチマンダイジンジャ)で300年前から代々伝えられており、市の無形文化財に指定されています。



長野県 うえだ し 上田市 のう ところ 農の心 かがや ここに輝く のうみん びじゅつ 農民美術 つち い 土に生きる ほこ 誇りと よろこ 喜び

農民美術とは長野県上田地域の伝統工芸品で、信州の高山植物などを題材にし、独特の彩色方法により木肌を生かした彫刻です。上田市ゆかりの洋画家である山本鼎(カナエ)が、大正期に、芸術とは縁のなかった農民の生活向上と生きがいや誇りを持たせることを目的に、農閑期(ノウカンキ)の副業として広げたのが始まりです。現在は、その「あたたかさ」から多くの人に土産物や記念品として愛される一方、より芸術的な作品も製作され、昭和57年には長野県の知事指定伝統工芸品に指定されています。本作品は、農民美術の興りや全国の民芸品に影響を与えていった様子などと共に、その製作工程を映像で克明に記録することを目的に制作されました。



長野県 ^{ながの し} 長野市 (旧戸隠村) ^{とがくしむら} 戸隠踊り ^{せんちようおど} 宣澄踊り ^{とがくしむらじゅうよう むけいぶん かざい} 戸隠村重要無形文化財

戸隠(トガクシ)の「宣澄(センチョウ)踊り」は、戸隠山顕光寺における天台・真言の法論の最中、応仁2年(1468)に暗殺された天台宗大先遍(テンダイシユウダイセンダツ)、宣澄阿闍梨(センチョウアジャリ)を偲んだ踊りです。毎年旧盆の8月16日、野良着姿(普段着)に手拭で頬かぶりをした男性が五斎神社(イツキジンジャ)境内の宣澄社前に集まり、酒を酌み交わしながら踊ります。「踏む」「蹴る」の動作が中心の素朴な踊りで、前唄7つ・中唄5つ・後唄3つからなり、七五三踊りともいわれています。

また、修験道(シュゲンドウ)に深く関連した踊りとされ、北信濃一帯に伝えられている烏踊・盆じゃもの・蹴りこみ踊・田の草踊などは、この宣澄踊りが起源と考えられています。現在では長野市無形重要文化財に指定され、保存会を通して後世へと受け継がれています。



岐阜県 ^{たかやまし} 高山市 (旧高根村) ^{ひわだまつ} 日和田祭り ^{こうげん さと でんとう いき} 高原の里に伝統が息づいて

毎年8月12日・13日の二日間、日和田祭りが行われ、飛騨で一番の大きさを誇る大太鼓が鳴る中、帰省した大人や子どもたちが祭りに参加して賑わいをみせます。笛や歌に合わせて舞う獅子舞は、信州・飛騨の他地域に類例を見ない雄一頭と雌二頭で舞うもので、「あくれ獅子」、「幕切れ」、「鈴の舞」、最後に「嬢(ヘンベ)取り」と続く神楽です。

祭りの一番の見どころは、13日の本祭りの夜に行われる「おかめの舞」と「神代踊り(ジンダイオドリ)」で、夜遅くまで盛り上がりします。

また、祭りの舞台となる一位森八幡神社(イチイモリハチマンジンジャ)を囲むイチイの原生林は、国の天然記念物に指定されています。



岐阜県 ^{しらかわむら} 白川村 ^{ひだしらかわこう} 飛騨白川郷のどぶろく祭り

白川村のどぶろく祭りは、木谷八幡(キダニハチマン)神社、平瀬白山(ヒラセハクサン)神社、白川八幡(シラカワハチマン)神社、鳩谷八幡(ハトガヤハチマン)神社、飯島八幡(イジマハチマン)神社の5つの神社で、豊作を喜び、家内安全と山里の平和の祈りを込めて盛大に行われます。

どぶろくは、和銅年間(約1300年前)頃から祭礼用として用いられてきたと伝えられており、祭礼では、神社ごとに醸造されたどぶろくが、参拝者や遠来の客一人ひとりにふるまわれ、村人と一緒に杯を交わします。

また、奉芸殿では、獅子舞や民謡などの郷土芸能が披露され、夜更けまで境内は賑わいます。



静岡県 ^{あたまし} 熱海市 ^{きのみやじんじゃ かしまおどり} 来宮神社鹿島踊

鹿島踊は、常陸国(ヒタチノク)(現在の茨城県)鹿島地方で、鹿島神宮を信仰する人たちによって起こり、海路舟によって各地に伝えられたとされる芸能で、「みろくおどり」ともいわれます。北は神奈川県小田原市石橋から南は静岡県東伊豆町北川まで、相模湾の西側の海岸線20数か所、熱海市では来宮(キノミヤ)、多賀(タガ)、下多賀(シモタガ)、阿治古(アジコ)、初木(ハツキ)の5神社に、多少の変化を生じながら伝承されています。

踊り手は5行5列の25人を基本に、太鼓、鉦(カネ)、黄金柄杓(コガネビシヤク)、日形(ヒガタ)、月形(ツキガタ)、幣(ヘイ)などの持ち物をそれぞれに持ち、方形に並んで、または丸く輪になって踊ります。これに数人の唄い手と警備役が加わり、毎年7月、来宮神社例大祭において披露されています。



静岡県 ^{しまだし} 島田市 ^{しすおかけん していむ げいみんぞくぶん かざい} 静岡県指定無形民俗文化財 ^{しまだ かしまおどり} 島田鹿島踊

この記録は、静岡県指定無形民俗文化財「島田鹿島踊」を平成7年10月15日を中心とした島田大祭において撮影収録したものです。

島田宿や島田大祭の概要、鹿島踊の由来と紹介、祭りの準備から本祭、舞納めまでが統括的に捉えられるよう構成されています。

「鹿島踊」は、元禄8年から伝わる島田大祭の一環として奉納されるもので、隊列を組んだ三番叟(サンバソウ)・お鏡・鼓・ささらの役が、それぞれ別の型の踊りを同時に踊るところに独自性が見られます。



静岡県 ^{やいづし} 焼津市 ^{しすおかけん していむ げいみんぞくぶん かざい} 静岡県指定無形民俗文化財 ^{やいづしんじゃ ししきや} 焼津神社 獅子木遣り

獅子木遣りは、毎年8月13日の焼津神社例大祭(焼津荒祭り)の渡御行列(トギョギョウレツ)の先頭として、雌雄2頭の獅子頭から延びる獅子幕を、手古舞衣裳(テゴマイイショウ)を身に着けた少女たちが持ち、獅子の運びに合わせて木遣歌を歌いながら市内を練り歩く民俗行事です。昭和53年3月に静岡県無形文化財に指定され、12月には「神ころかし」とともに国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に指定されました。

現在、木遣歌は保存会が作られて歌い継がれており、毎年夏が来ると小学生の女の子の参加を募って特訓を積み、祭り本番に備えています。



愛知県 ^{とよかわし} 豊川市 (旧一宮町) ^{いちのみやちょう} 砥鹿神社 ^{とがじんじゃ} 田遊祭 ^{たあそびさい}

田遊びは、田楽と並び稲作儀礼に絡む民俗芸能として知られており、三河地方は有数の伝承地のひとつです。三河国一宮である砥鹿(トガ)神社では、「田遊祭(タアソビサイ)」と呼ばれ、現在では毎年1月3日の午後、里宮拝殿にて行われています。

椎の葉を敷き詰めた部分を田所(タドコロ)とみなし、代官1名・田主(タヌシ)1名・田人(タビト)10名・巫女1名、に扮した氏子ら計13名が、春の田打行事(タウチギョウジ)から始まる一連の所作を演じ、五穀豊穡を祈願します。

田遊祭は大きく11段から構成されており、最後に収穫の稲村へ祝詞を奏上して終わりますが、途中、田人らの即興でのやり取りが、初詣で賑わう正月の境内に笑いを誘っています。



愛知県 ^{とよたし} 豊田市 ^{いしの まんどう} 石野の方灯まつり

小峯(コミネ)町と芳友(ホウユウ)町上室(カミムロ)に伝わる方灯祭りは、子どもたちが「まんど」という麦わらのたいまつを振り回し、共同墓地近くの丘の上を回る盆行事です。

祭りの前、子どもたちはたきぎを集めます。そして、祭りの日に麦わらを2~10束ほど束ね、竹に縛ってたいまつを作ります。これに中央の焚き火から火をつけて、「鬼でも飢餓でも、さあこい」と言って振り回し、下方へ投げ込むのです。

この行事では、祖先供養を行い、合わせて疫病払いを祈願しています。



三重県 鈴鹿市 **すずかの地域伝統芸能**

鈴鹿市には古い伝承を持つ獅子舞がいくつかあります。三重県の無形民俗文化財に指定されている、山本町の椿大神社(ツバキオオカミヤシロ)の獅子舞や稲生(イノウ)の伊奈富神社(イノウジンジャ)の獅子舞、そして、一ノ宮町の都波岐奈加等神社(ツバキナカトジンジャ)や下箕田町(シモミダチョウ)の久志弥神社(ククシミジンジャ)の獅子舞などで、これらの獅子舞は、それぞれの地名から「山本流」、「稲生流」、「中戸流(ナカトリユウ)」、「箕田流(ミダリユウ)」と呼ばれています。また、これらの四流の獅子の影響力は絶大で、三重県の北勢・中勢地区の多くの獅子舞がこれら四流の獅子のいずれかに分類されるといわれています。このビデオには、鈴鹿市に残る20箇所の獅子舞が収録されています。



三重県 津市(旧美里村) **桂畑地蔵踊り**

桂畑(カツラハタ)地蔵踊りは、津市の西部、山間に開けた鮮やかな水田風景が美しい美里町の桂畑地区に伝わる伝統行事です。毎年8月24日、地蔵盆の日に洞雲寺(ドウウンジ)の子安観音菩薩に「かんこ踊り」が奉納されます。6名の踊り手に歌い手6名、貝吹き5名、笛吹き5名の演奏で構成される踊りは、夕方6時頃から始まり、夜の11時頃まで続けます。踊りには「宮踊り」「寺踊り」など10番ほどの演目があり、豊年踊りの系列に属するもので、田植え姿に稲穂の象徴としての花を背負います。子宝・五穀豊穡を祈り、南北朝時代から続くといわれています。



滋賀県 近江八幡市 **伝統技術の記録 手縫いの八幡靴**

地域を支えてきた地場産業である皮革産業(八幡靴(ハチマンガツ))の継承に向けて、手縫い靴の製作工程の啓発と記録保存のための映像づくりを行いました。内容は、「プロローグ 八幡靴の簡単な概要」「製作工程 1.甲皮(コウカワ)の工程 2.底付けの工程 3.仕上げ工程」「資料編」の3部構成となっています。



滋賀県 愛荘町 **近江上布**

近江湖東地方の伝統的産業である近江上布の制作技術は、近江の急激な社会情勢の変化およびそれに伴う生活様式の転換により、消滅の危機にさらされています。そこで、現時点で実現できる最も古い近江上布の技術を記録しました。この映像は、縦模様(カスリモヨウ)の上布の中で、緯糸(ヨコイト)のみに模様を染めて織り上げる経緯織(ヨコカスリ)、経糸(タテイト)・緯糸両方ともに模様を染めて織り上げる経緯織(タテヨコカスリ)、そして、どの経にも共通する仕上げについて記録されています。



京都府 南山城村 **田山花踊り 田山花踊り保存会 四十年の歩み**

田山花踊りは、氏神様である諏訪神社に毎年11月3日の秋祭りの日に奉納されます。この踊りは、雨乞いの中でも最高の願かけとして行われてきました。起源は詳しく分かっていませんが、1773(安永2)年の飢饉の年に行われたことが記録に残っています。奉納は、地域の中心地から入端行列(イリハギョウレツ)により1時間あまりかけて神社までねり歩きます。その後、神社の境内で愛宕踊り(アタゴドリ)などを1時間余り踊ります。参加者は、奉納の日まで歌や太鼓、各パートに別れて練習を重ね、本番に臨みます。保存会では、積み重ねた歳月を大切に、これからは継承者の育成を通じて地域文化の継承と活性化を図ろうと精進しています。



京都府 南丹市(旧園部町) **摩氣神社のお田植祭**

緑の風とさわやかな光がさす6月の朝、園部町竹井にある摩氣神社では「お田植え祭り」が行われます。早乙女らは藍染めの木綿紉の着物に薄緑の帯を締め、赤いたすきをキリリと結び、「一つ心に植えゆく早苗 神の御前の大床に…」の歌に合わせて、拝殿でお田植え踊りを奉納します。本殿前の階段では、袴姿の宮主が竹竿の先に鳴子のついた家型の板を鋤としてしるかきを行い、早乙女が早苗に見立てた粽(チマキ)を階段に置いていきます。人々の大地に寄せる信頼と望みを込めて、千年以上受け継がれてきた神への祈りの儀式。その意地と誇りが、豊穡の歌をこれからも高らかに奏で続けます。



大阪府 摂津市 **伝えようふるさとの唄を**

郷土芸能の保存事業として、江州音頭藤若会(ゴウシュウオンドフジワカカイ)や摂津民謡連合会の発表、インタビュー風景をまとめたDVDです。このDVDは、これまで文化財保存継承事業として補助してきた両団体の構成員の高齢化が進み、内容の記録保存が急務となったことを受けて、郷土芸能の普及と啓発、後世への継承を目的として作成されました。



兵庫県 たつの市 **うすくち醤油造りと匠の技の伝承記録**

龍野で生み出された「うすくち醤油」は、江戸時代より連続と作り続けられてきましたが、近年の機械化により旧来の工程が姿を消したことによって、伝統技術が失われつつあります。伝承者も高齢となり、やがて地域から完全に失われていくと考え、映像に記録し、技術をビジュアルに保存継承する資料として制作しました。映像では、醤油造りの現在の工程と伝統的製造を対比することによって、かつての製法の意味を理解できるように記録し、また、醤油造りに欠かせない関連産業であった醤油樽作りの製作工程と麴造りの伝統技術も合わせて収録しています。なお、樽作り、麴造りは、ダイジェスト版を作り、多くの人に見てもらえるようにしました。



奈良県 吉野町 ふるさとの歴史を訪ねて 蔵王堂の節分会 一鬼火の祭典

毎年2月3日に、吉野山金峯山寺(ヨシノヤマキンブセンジ)蔵王堂で節分の法要が行われます。法要が終わると、鬼火の祭典と呼ばれる鬼の調伏式が行われます。この調伏式は他の寺社のものとは違い、「福は内、鬼も内」と唱え、全国から追われてきた鬼を迎え入れようとするものです。そして、経典の功德や法力によって、また信徒らが撒く豆によって、荒れ狂う鬼たちを仏道に入らしめて終わります。起源は定かではありませんが、金峰山寺の開祖である役行者が法力で鬼を呪縛し、仏法を説いて弟子にした故事に基づくといわれています。



和歌山県 広川町 和歌山県指定無形民俗文化財 乙田の獅子舞

「乙田の獅子舞」は、広八幡神社(ヒロハチマンジンジャ)の秋祭に奉納されます。広八幡神社は「稲村(イナムラ)の火」の故事で名高い神社ですが、天神社(テンジンジャ)を摂社としており、獅子舞は天神社の前で舞われます。この獅子舞は、基本的には三人立ちで舞い手が入れ替わりながら披露され、洗練された所作と正確な囃子手(笛と太鼓)で、見るものを圧倒します。演者に習熟した高い技量が求められる民俗芸能です。



和歌山県 海南市 和歌山県指定無形民俗文化財 山路王子神社の獅子舞

「山路王子神社の獅子舞」は、例大祭(10月の体育の日、以前は10月15日)に、境内にて奉納されます。山路王子神社は、熊野街道沿いの一壺王子社(イチツボオウジンジャ)の跡にあります。道でつながる藤代王子(フジシロオウジ)(現藤白神社(ゲンフジシロジンジャ))の「藤白の獅子舞」とは、相違点はいくつかあるものの同系統の獅子舞で、七人立ちで行われます。(藤白の獅子舞は五人立ち)



和歌山県 和歌山市 和歌山県指定無形民俗文化財 木ノ本の獅子舞

「木ノ本の獅子舞」は、和歌山市木本地区・木本八幡宮の秋の例祭で舞われます。地上の舞とだんじり上の舞があり、どちらも勇壮なことで知られています。特に、だんじり上の舞はいわゆる梯子獅子で、青竹の上での激しい動きには、目を離すことができないほどの迫力があります。



鳥取県 米子市 淀江さんご節 銭太鼓・傘踊り・壁塗りさんご 淀江さんご節保存会

淀江(ヨドエ)さんご節は、約300年前の江戸元禄年間に起源を持つ郷土民謡です。三弦・太鼓・打釘(ウチガネ)の旋律に和して賑やかに歌われ、七七五調の歌詞は安来節の元唄といわれています。淀江は古くから港町として栄え、北前船が数多く寄港していました。淀江さんご節は、各地方の船乗衆が歌う民謡と、淀江古来の民謡が融合して誕生し、幕末から明治にかけて酒席で持て囃されて、一大ブームとなりました。やがて、軽快なテンポに合わせて左官が土壁を塗りあげて情景を滑稽に演じる「壁塗りさんご」が踊られるようになり、棟上げ、結婚などの祝宴でも披露されるようになりました。また、銭太鼓、傘踊りも、おめでたい芸能として踊られるようになりました。



鳥取県 倉吉市 技に生きる 倉吉の郷土玩具 土天神とはこた人形

張子(ハリコ)と土人形は、信仰的な意味合いを持つ玩具として全国各地で製作されましたが、昭和戦後から急速に姿を消していきました。土人形の中でも、土天神(ドロテンジン)は、鳥取県の伯耆(ホウキ)地方を中心に中国地方で初節句に男の子の無事な成長を祈って贈る風習がありました。倉吉(クラヨシ)の土天神は、赤い彩色が施されています。また、張子のはこた人形は、手足の表現がされていない張子人形で、倉吉を代表する郷土玩具となっています。倉吉で製作が開始された時期は明確ではありませんが、天明年間に備後(ビンゴ)から伝わり、倉吉で作られ始めたといわれています。土天神・張子とともに、ほとんどの製作者が昭和30年頃には廃業し、現在は三好明(ミヨシアキラ)氏が唯一の製作技術保持者となっています。



島根県 隠岐の島町(旧布施村) 大山神社祭礼 布施の山祭り

布施の山祭りは、隠岐の島町布施(フセ)に鎮座する大山(オオヤマ)神社の例祭です。布施の山祭りが文献に初めて見られるのは、寛文10(1667)年です。大山神社の御神体は今も成長を続ける大きな杉の木で、布施地区の人にとっては、他の神社とは違う特別な地位を保ち続けている信仰の対象です。例祭は、毎年4月初丑の日ですが、行事としては、その前日の「カズラ伐り」から始まります。これを「帯裁ち」といい、翌日の神事に使う榊、ハナなども合わせて切り出します。そして、祭り当日には、このカズラを南谷(ミナミダニ)、中谷(ナカダニ)の両大山の御神木、そして荒神社(コウジンジャ)の御神木に巻きつけます。これを「帯締め」といい、帯裁ちとともに山祭りの主要な行事となっています。



岡山県 美作市(旧東粟倉村) 東粟倉村伝統芸能 獅子舞

岡山県東部の美作市の旧東粟倉村地区には、江戸期嘉永年間より伝わるといわれる獅子舞が残されています。村内後山神社(ウシロヤマジンジャ)とその境外社の妙見神社では、両神社の氏子により保存会が結成され、毎年10月の秋祭りにこの獅子舞が奉納されます。



岡山県 津山市(旧勝北町) 岡山県重要無形民俗文化財 新野まつり

岡山県重要無形民俗文化財の「新野まつり」は、新野山形の八幡宮を親神様として、二松(フタマツ)・天穂日(アマホヒ)・天津(アマツ)・天満(テンマン)神社の氏子たちが7体の神輿をかつぎ、稲塚野(イナツカノ)の神事場(ジンジバ)に集まって豊穰の秋を祝う室町時代から続く大祭です。
このビデオは、祭りにまつわる奉納相撲・獅子ねり・浦安の舞などを1年を通して収録したもので、貴重な祭りを後世に伝えていくために製作されました。



広島県 呉市 呉市無形文化財 阿賀のお漕船

平清盛が始めたといわれる厳島神社(イツクシマジンジャ)管絃祭において、阿賀(アガ)のお漕船(コギブネ)が御座船(ゴザブネ)を引き、御神体を対岸の地御前神社(ジゴゼンジンサ)まで渡す、勇壮かつ華やかな海上行進の様子を記録したビデオです。



広島県 呉市(旧豊町) 櫓祭り ~大長地区~

大長(オオチョウ)地区の秋を告げる大長櫓祭り(オオチョウヤグラマツリ)は、毎年9月の最終土曜日に、宇津(ウツ)神社前広場(札場(フダバ))を舞台に行われます。秋の美りを感じ、五穀豊穰、諸願成就、町内繁栄を祈願するこの祭りは、享保年間(250年前)にはすでに行われていたという記録が残っています。
祭りの見どころは、高さ3m近い大櫓が練り歩く様子。屋廻し(ヒルマワシ)では、中で太鼓を打つ子ども、担ぎ棒の上で掛け声をかける子どもも乗るため、大櫓の総重量は2トンにもなります。
映像の構成は、祭り前日の櫓の準備に始まり、祭り当日の宮初め(ミヤハジメ)、宮出し(ミヤダシ)、屋廻し、宮入れ(ミヤイレ)の順となっています。



広島県 庄原市(旧口和町) 湯木の盆踊り 向泉の奉納花田植大月三角山神社秋季楽舞

庄原市口和町は中国山地の南側に位置し、農業を中心として発展してきました。また、古代から近世にかけて鉄の産地として戦略上の要衝であったため山城も多く、毛利と尼子が合戦した大合戦橋(オウガセバシ)などの史跡が存在しています。
さらに、農業や合戦にまつわる芸能も残されています。今後は、西暦1400年代より多加意加美(タカオカミ)神社に奉納されていたとい伝えられる「向泉(ムコウイズミ)の田楽」、当地方を支配していた黒岩城主和泉(イズミ)氏の戦勝祈願に舞われたという「大月三角山神社秋季楽舞(オオツキミスミヤマジンジャシュウキガクマイ)」、戦国時代の争いに倒れた地方武士や農民の霊を慰め、傘踊りで五穀豊穰を祈る「湯木の盆踊り」を映像化しました。



山口県 下関市(旧豊北町) 浜出祭 山口県指定無形民俗文化財

浜出(殿)祭(ハマイデ(ドノ)サイ)は、7年に1度行われる豊北(ホウホク)地区(下関市)最大の民俗祭礼行事で、山口県指定無形民俗文化財に指定されています。
山地側の田耕(タスキ)小野にある厳島(イツクシマ)神社の女神と、海浜側の神玉にある蛭子(エビス)社の男神の出合祭で、各々生産を異にした山と浜の陰陽和合による式年祭礼行事によって、地域の繁栄と秩序を願った祭とされています。
田耕、神玉(カミタマ)両地区間約18kmの間を、各々の氏子らによって組織された大行列が、古式にのっとった衣装に身を包み、祭場である土井ヶ浜まで練り歩きます。途中、滝部(タキベ)の出合儀祭場で、鯛切り神事ははじめ古からの慣例に従った神事、宮座行事が行われます。



徳島県 美波町(旧日和佐町) 吹筒花火 赤松神社

海亀で有名な徳島日和佐(ヒワサ)の大浜海岸から10km入った山間に、周囲が小山脈に囲まれた里山の赤松があります。
ここには、江戸時代から伝わる手作りの吹筒花火があります。約1mの竹筒に黒色火薬を詰め込み、竹筒の上方の穴から点火された火薬が吹き出して、高さ約15mで花火となって夜空に咲く吹筒花火は、まるで芸術作品のようです。
秋の例大祭(10月)には、15ある集落の煙火組(エンカグミ)から各1本ずつの吹筒花火が氏神様に奉納され、多くの観客が県内各地から集まります。
吹筒花火は、平成10年10月20日に町の無形文化財に指定されました。地域の人々は、この地に伝わる神踊(カミオドリ)とともに、伝統文化として継承に努めています。



香川県 綾川町(旧綾南町・綾上町) 重要無形民俗文化財 滝宮の念仏踊

毎年8月25日に綾川町滝宮で行われている「滝宮の念仏踊」の始まりは、仁和4(888)年。讃岐の国中が大干ばつにみまわれた時、国司であった菅原道真公が国府近くの城山(坂出市)に7日7夜の雨乞いの祈禱を行ったところ、満願の日に大雨が降り、喜んだ人々が牛頭天王社(ゴズテンノウシヤ)(現滝宮神社)で踊ったのが始まりだといわれています。
後に、道真公が筑紫国で亡くなったことを聞き、天満宮を祀ってその神前で道真公の菩提を弔うために踊るようになりました。さらに、讃岐に流された法然上人が、念仏を唱えて踊るよう振りつけを行い、これが念仏踊として今に続いているといわれています。
昭和62年に、重要無形民俗文化財として国の指定を受けました。



香川県 三豊市(旧仁尾町) 大祭を後世に伝える御神輿と御神船 履脱八幡神社 松林を行く神輿 賀茂神社 御神船と大祭

昔、八幡(ハチマン)神社は農業・漁業者が氏子総代、賀茂神社は商人が氏子総代となっていた神社で、それぞれ最大級の祭りが行われてきました。戦争前後を境に2つの神社は日を続けて祭を行うようになったため、現在では、両神社の特徴ある祭りの姿を連続して見ることができます。
両神社とも山車(獅子、ちょうさ)については共通しているものの、御神体をお移りするものが、八幡神社はお御輿、賀茂神社はお船とまったく異なります。これは、神社の役割が昔から相対していたことに端を発しています。
このたび、祭事の練習・準備段階の映像記録を作成することにより、次世代への継承および広く一般住民への周知に役立てたいと考えます。



愛媛県 新居浜市(旧別子山村) ふるさとの民謡踊り

本作品は新居浜市別子山(ベッシヤマ)に伝わる郷土芸能の記録保存を目的に制作されたもので、併せて別子山の美しい自然や歴史的建物などを古写真を交えて紹介しています。
たとえば、鎌倉時代に始まって別子山に伝わる平家の落人伝説と関係があるといわれているのが「牛若踊り」です。「十二の踊り」は、雨乞い踊りから独立したもので、八五調の歌詞が古風な旋律で歌われます。このほか、「はいや踊り」(七七五五調)、「しょうがえな踊り」、「ええとこな踊り」(七七五五調)や、侍踊りともいわれる「トンカカ踊り」が収められています。
収録は、平成13年7月に別子山村民謡保存会の協力を得て行われました。



愛媛県 大洲市(旧長浜町) 豊茂の民俗文化 五ツ鹿踊り・越後獅子・獅子舞

大洲市豊茂地区には「豊茂五ツ鹿踊り」「越後獅子」「獅子舞」の三つの市指定無形民俗文化財があります。
「豊茂五ツ鹿踊り」は、仙台藩主伊達正宗の長子秀宗が元和元年(1615)宇和島藩主として入府した際、故郷の民俗芸能であった八ツ鹿踊りの手練者を引き連れてきたのが起源とされ、各地に伝わる間に8人踊りが5人踊りになったといわれています。天保12年(1841)頃から今日まで165年間継承されてきました。
雄獅子舞と雌獅子舞がある「獅子舞」も八ツ鹿踊りと一緒に伝えられたといわれています。大正6年(1917)頃、豊茂東地区で発足した「越後獅子」は、赤獅子と青獅子が同じ振付で踊り、赤獅子は無病息災、青獅子は家庭円満をもたらすといわれ、縁起の良い郷土芸能です。



高知県 高知市 朝倉神社 秋季祭礼 ～高知市保護無形民俗文化財～

朝倉神社は、土佐一国の総鎮守土佐神社に次いで、土佐の二の宮といわれる歴史の古い神社です。毎年11月23日に行われる秋季祭礼では、約150名の氏子が本仕する神幸のほか、御旅所(オタビショ)で行われる棒振りや神相撲、ナンモンデ踊り、神踊り(コオドリ)、浦安の舞が奉納されます。
これら民俗芸能一式に保存すべき価値があると認められ、平成11年5月15日に高知市保護無形文化財に指定されました。以前は巫女神楽(ミコカグラ)と流騎馬(ヤブサメ)もありました。なお、ナンモンデ踊りのナンモンデにはいくつかの見解があり、「南無阿弥陀」とする説もあります。



高知県 香南市(旧香我美町) 香我美町地域伝統芸術 若一王子宮 獅子舞 若一王子宮 お烏喰いの儀 高知県無形文化財 山北の棒踊り土佐凧とフラフ

若一王子宮(ニヤクイチオウジグウ)で行われる「獅子舞」は、秋の神祭に悪魔退散・五穀豊穡を祈願して奉納されている伝統行事で、高知県無形文化財に指定されています。「お烏喰いの儀(オカラスグイノギ)」は、日本3社の奇祭で唯一現存しているもので、祭り前日の朝に浜で身を清め、慶事に社に参詣して屋根に餅を備え、朝までに烏がすべてついばむかで、神慮を占います。
浅上王子宮(アサガミオウジグウ)の「山北(ヤマキタ)棒踊り」は、秋の神祭で奉納される伝承行事で、高知県無形文化財です。20人棒・小棒打ち・連返し・ようたんぼうが演目となっています。
土佐凧は競技「掛凧」(凧にシッポをつけて掛け合う)と誕生祝等の祝事に揚げ、フラフは紺屋で手描きの伝統柄で、男子の節句に揚げます。



福岡県 久留米市 国指定重要無形民俗文化財 大善寺玉垂宮の鬼夜

毎年正月7日に行われている行事で、「日本三大火祭り」のひとつともいわれる「大善寺玉垂宮の鬼夜(ダイゼンジタマタレグウノオニヨ)」の映像です。
祭りの起源は1600年程前といわれ、屋の鬼面尊神(キメンソウジン)の神事と種時(タネマキ)神事、夜の大松明廻し(オオタイマツマワシ)と鉦面(ホコメン)神事および鬼堂回(オニドウマワリ)などの行事があります。特に大松明廻しは、地元の氏子から奉納される直径1m、全長約12mの6本の大松明が、裸の若者たちによって支えられ、火の粉を散らしながら本殿の周りを勇壮に廻り、圧巻です。
映像では、大勢の見物人を集める祭り当日の様子に加えて、社寺と多くの地域の人々がかかわる年末の準備から翌日の片付けまで、貴重な伝統行事の裏側も紹介しています。



福岡県 篠栗町 磐戸ふたたび 福岡県指定無形民俗文化財 太祖神楽

江戸時代、黒田藩は神道集団の統合策の1つとして表層屋部(オモテカサヤグン)の神職に神楽座を組織させ、同郡の総社である太祖(タイソ)神社に神楽を奉納しました。
明治維新後、神職による神楽座は解体されましたが、氏子たちの熱意により神楽は伝承され、大正3(1914)年、当時神楽の名手であった太祖神社の神官佐々木(ササキ)氏が13演目をまとめて氏子の青年たちに伝承・指導しました。以後、数名の伝承者の努力により、第2次世界大戦および大戦後の激動期を乗り越え、現在に至っています。
太祖神楽は出雲系(イズモケイ)の里神楽(サトカグラ)で、毎年春と秋に太祖神社下宮(タイソジンジャゲグウ)神楽殿にて奉納されます。元来、舞神楽(マイカグラ)7種目、面神楽(オモテカグラ)5種目、小神楽(ショウカグラ)を含む蛭子舞(ヒルコマイ)の計13演目ですが、今では7演目が奉納されています。



佐賀県 佐賀市 いにしへの雅ここに 白鬚神社の田楽

白鬚神社の田楽は、毎年10月18、19日に行われる白鬚神社の祭典に川久保地区の人たちによって奉納される舞楽で、稚児田楽(チゴデングク)の種類に属します。
この田楽は、造花を持つ「はなかため」と鼓を持つ「すってんてん」の幼児各1名、編木(ササラ)を打つ「ささらつき」の少年4名、太鼓を打つ「かけうち」の青年2名、笛役の壮年7名の演者で行われます。各演者の所作扮装(ショサフソウ)に特色があり、九州地方では珍しい存在です。
白鬚神社における田楽の記録は、享保19(1734)年建設の石鳥居に「時奏村田楽(トキソウスムラデンガク)」とあり、それが最初とされていますが、その起源は平安朝時代、田植えのおりに鼓を打って田植歌の伴奏をしたものが、後に笛、鼓などを加え、次第に形を整えて演奏する習慣となったものと思われる。



佐賀県 鹿島市 鹿島の伝統 面浮立

面浮立(メンブリユウ)は、いかめしい鬼の面を被った勇壮な掛け打ち姿の舞い手を主役として、浮立(フリユウ)行列が鉦(カネ)や太鼓・笛などを囃して行う、佐賀県を代表する伝承芸能です。
その勇壮さから戦国時代の合戦に由来するともいわれ、佐賀県西南部を中心に、豊作祈願や諸病退散を目的として、古くから奉納されてきました。
作品では、県指定重要無形文化財である音成(オトナリ)地区と母ヶ浦(ホウガウラ)地区に伝わる2つの系統の代表的な面浮立について、由来をはじめ用具や役割、奉納の構成を対比させながら、コンパクトにまとめています。また、大人から子どもへの伝承活動も取り上げ、地域の伝統文化を継承していく必要性を訴える内容になっています。



長崎県 佐世保市 ヤモード祭 ~淀姫神社の大しめなわ~

ヤモード祭は、佐世保市の松原町にある淀姫(ヨドヒメ)神社に伝わる民俗行事で、矢峰(ヤミネ)、松原両町の氏子(ウジコ)が前年に収穫された稲藁を持ち寄って神社の一の鳥居に架かる大注連縄(オオシメナワ)の架け替えを行うものです。

毎年1月26日に小正月の行事として行われ、その年の稲作を始めるにあたって冬の間山の神として山に戻っていた田の神を里に迎えるため、矢峰と松原両町から選ばれた両親が健在な青年2名が「ヤモード」(「山人・やまうど」がなまったもの)となって、一連の行事をつかさどります。

行事の起源は不明ですが、少なくとも江戸時代前期には行われていた可能性があり、古式民俗行事を今日に伝える貴重な行事として、長崎県無形民俗文化財に指定されています。



長崎県 諫早市 無病息災祈願 豊破り 八幡神社

一般に「豊破り」の呼称で親しまれているこの祭りは、「八幡神社大祭」が正式名称で、毎年成人の日に、諫早市白浜町の八幡神社境内で行われます。

神事後、近くの公民館で待ち構えていた氏子の若い衆の団が、太鼓の合図で境内に走り込んで来ますが、神社の本殿入り口を量でふさいで入れないようにしており、入ろうとする者と阻止しようとする者の攻防が行われます。量を押し倒して社殿になだれ込むと、一団はその量を引き裂いてワラを取り出し、お互いの体をこすり合せて、1年間の無病息災を祈願するのです。

その後、神職が太陽と月をかたどった的に5本の弓矢を射て、その当たり具合で当年の吉凶を占います。



熊本県 山都町(旧清和村) 大自然の豊かな歩みと共に人形に心を集めて ~大いなる田舎・清和村~

宝歴の頃、豊後竹田(ブンゴタケタ)から伝えられた徳島系統の文楽人形で、語られる浄瑠璃(ジョウリリ)と人形が演じる勧善懲悪、忠孝、義理、人情を学ぶ場として農村の人気を集めました。嘉永の頃には、清和村一帯に数座の人形芝居があったといわれます。

明治初期には一時衰退しましたが、大正12年頃に復活。付近にあった旧座の人形や衣装道具などを集め、昭和3年の御大典奉祝(ゴタイテンホウシュク)の余興を目標として同好の士が集まり、文楽人形芝居・大昭座(タイショウザ)を組織、浄瑠璃や人形遣いなどを練習しました。

昭和29年には組織を強化して保存会を結成し、現在まで後継者の育成、人形、衣装、舞台装置などの保存修理を行うとともに、周辺村落の祭礼に出演するなどの技術の向上に努めています。



熊本県 天草市(旧栖本町) ~現代に甦る先人の魂の響き~ 栖本太鼓踊り

天草市のほぼ中央に位置する栖本町(スモトマチ)には、遺跡や文化財が数多く残されています。正保二年(1645年)富岡の初代代官、鈴木重成が天草・島原の乱後、島原全島の祈願所として栖本諏訪神社を建立しました。重成の子、重辰(シゲトキ)が神主に登用した森頭哉(モリスカキサイ)は、田畑を開かせる傍ら、日本古来の宗教を広め、村民の信頼を集めるようになり、それを象徴するかのよう太鼓踊りが奉納されるようになったといわれています。

先人達の思いを現代に継承し、次の世代に託していくべく、勇壮さと絢爛(ケンラン)さを兼ね備えた「栖本太鼓踊り」は、郷土の遺産として若者たちに連綿と受け継がれています。長い伝統が誇りとなり、文化となります。時代をこえた心が栖本太鼓踊りには刻まれているのです。



熊本県 南阿蘇村(旧白水村) 白水村岩戸神楽

熊本県の阿蘇地方に残る郷土芸能のひとつである「岩戸神楽(イワトカグラ)」を紹介した作品です。この岩戸神楽は、地区の八坂神社におよそ450年前から伝わっており、農耕と神話を主題とする長い伝統のあるものです。現在伝わっているものは全部で13座、上演時間は6時間にも及びます。

保存会は1974年5月に現在の構成員で結成され、以来、白水村唯一の神楽の保存団体として地元町村の神社での公演はもとより、各種の催事への参加を通じて地域に残された伝統芸能の保存・継承活動を続けています。平成3年・7年には台湾公演、平成12年には韓国公演も行いました。



大分県 豊後大野市(旧千歳村) 神々の舞 浅草流岩戸神楽

「浅草流岩戸神楽(アサクサリウイワトカグラ)」は、東九州一帯に広く伝播する大野系岩戸神楽の一派で、元々は、江戸時代末期に市内大野町にある浅草神社からおこった神楽とされています。その特徴は、勇壮活発な舞と、きらびやかな衣装にあり、舞は所作が荒々しくスピーディーで力強さを演出し、きらびやかな衣装は各演目により仕立てを変え、臨場感を醸し出しています。

この作品は、豊後大野市千歳町にある浅草流神楽座、柴山(シバヤマ)神楽、大木(オオギ)神楽、大迫(オオサコ)神楽の3座が共演し、今も伝わる36番の演目について、その紹介と解説を記録したものです。これは、人々が伝統を頑なに守ってきた成果であり、現在では他の神楽座では舞うことのできない演目も含まれているため、大変貴重な資料であるといえます。



宮崎県 西都市 いにしえの詩が聞こえる ~西都市に息吹く郷土芸能~

「三納(ミノウ)吉田盆踊」は、造花で飾り付けした藁(ワラ)づくりの編み笠と、かすりの着物をまとい、四ツ竹や団扇(ウチワ)等の小道具を利用するのが特徴です。天正11年頃に時宗の同僚上人が信徒とともに念仏で精霊の供養をし、お盆に踊りまわったのが始まりといわれています。

安政・文久の頃より伝わる「平郡(ヘグリ)十五夜踊」は、旧暦8月の十五夜の日(カネ)の音に合わせて踊られる太鼓踊りで、手甲(テッコウ)、脚絆(キャハン)、かすり姿の女性が優雅に踊ります。

また、旧暦の9月9日に奉納される「中尾棒踊」は五穀豊穡や悪疫退散などを神に祈る勇壮な踊りであり、「神代(カミヨ)神楽」は、日向の高千穂峰に天降られた天孫ニギノミコト一行が良き土地、笠狭(カササ)の御崎(ミサキ)へと進む御幸(ミユキ)の様子を神楽で表したものです。



宮崎県 小林市 いつも心はこの里に

小林市に古くから受け継がれている郷土芸能を記録した映像集です。霧島山麓に抱かれた盆地に位置する小林市は、菜の花・桜・コスモス・エヒメアヤメなどの花々と市内各所で見られる湧水、そして満天の星空が美しい自然豊かな田園都市です。

この地で育まれた伝統文化の一つに神楽があります。「岩戸神楽(イワトカグラ)」は霧島山麓の村々で数多く舞われた神舞(カンメ)と呼ばれるもので、かつてはその年の収穫を神々に感謝するため33番を夜通し踊り明かす神事でしたが、現在は地元夏祭りに合わせて、剣の舞など3番が奉納されています。



宮崎県 えびの市 打ち植え祭

打ち植え祭は、えびの市の今西・田代地区に伝わる豊作祈願行事で、毎年初卯（ハツウ）に近い日曜に行われています。今西地区の人々は、この年の「神馬（シンバ）」役の人を伴って田代天宮（タシロアマミヤ）神社に向かい、男神（オトコガミ）を乗り移らせます。そして今度は両地区民で歩いて今西香取（イマニシカトリ）神社に向かうのですが、この途中、神馬は待ちかまえた住民から竹笹で背や尻をたたかれながら、香取神社に逃げ込むのです。以前は本物の馬を使っていたが、現在は人が代わって行っています。香取神社に到着後、神事が行われ、その後に農夫姿に変装した地区民によるユーモラスな田植え狂言が行われます。



鹿児島県 和泊町 和泊町の伝統芸能

和泊町の歴史は、奄美世（アマンユ）、按司世（アジコ）、那覇世（ハナユ）、大和世（ヤマトユ）に区別されています。奄美世は原始から8～9世紀頃までを言い、階級社会以前の集落共同体でした。按司世では首長たちが支配する階級社会となり、続く文永3年から慶長14年までの340年間は琉球王朝の支配下にありました。沖永良部島に伝承されている文化・言語・風俗などの基盤はこの時期に作られましたが、琉球文化の影響の上に地域独自の文化を作り上げて、今日まで継承してきたのです。このような中で、和泊町では、「国頭（クニガミ）集落の竿打（ソウウ）ち踊り（ウドウイ）」「ヤッコ」「忍（シヌ）び踊り（ウドウイ）」「手々知名（テデチナ）集落の遊（アシ）び踊り（ウドウイ）」「畦布（アゼフ）集落の獅子舞（シシマイ）せんする節」「玉城（タマジロ）集落の仲里節（ナカザトブシ）」「永嶺（ナガミネ）集落の収納米（シュウトウマイ）」を無形民俗文化財として指定し、保存伝承に努めています。



鹿児島県 屋久町 太古の息吹を現代に伝える ～「自然遺産・屋久町」の郷土芸能～

世界自然遺産の島・屋久島の南部に位置する屋久町には、3つの郷土芸能が存在します。屋久町東部の安房（アンボウ）地区に伝わる「如竹（ジョウチク）踊り」は、安房出身の儒学者・泊如竹（トマリジョウチク）の遺徳をしのび、300年来伝わってきた古式ゆかしい踊りです。原地区の「ごちよう踊り」は、平成9年に86年ぶりの復活を遂げた勇壮な太鼓踊りです。湯泊（ゆどまり）地区の「笠踊り」は江戸時代末期、湯泊の海岸に漂着した琉球の人々から伝えられたとされています。いずれの踊りも後継者不足が悩みとなっていますが、本記録映像には、由来や衣装、化粧の仕方までが収録されており、将来に受け継がれる内容となっています。



鹿児島県 南大隅町（旧佐多町） 悠久の時を刻む故郷 ～佐多町に伝わる郷土芸能～

太鼓踊り（ズッカンカン）は、島津氏が琉球に出兵した際のがいせん祝いに踊った踊りが始まりと言われています。上之園（アゲノソノ）では、旧暦6月15日の祇園祭りに農作物の豊作を祈って現在も踊りつがれています。上之園太鼓踊りは、太鼓、鉦（カネ）、法螺貝（ホラガイ）、幟（ノボリ）の約30名で構成されています。かつては7つの門（カド）から太鼓と鉦を1組ずつ、合計14名で受け持っていました。門とは今の班の前身となったもので、上之園は入ヶ町門（イリガマチカド）、長濱門（ナガハマカド）、阿呆門（アボカド）、持留門（モチドメカド）、上之園門（アゲノソノカド）、堀切門（ホリキリカド）、植木門（ウエキカド）の7つの門からなっています。現在、踊り手は門ごとではなく任意で選ばれますが、幟だけは門ごとに持つ風習が今も残されています。また、この太鼓踊りは通称を「ズッカンカン」と呼び、雨乞い踊りとしても踊られていました。太鼓踊りを踊ると、不思議と雨がよく降ったといわれています。



沖縄県 石垣市 ふるさと石垣島 獅子祭

石垣市の中心街にある字登野城（アザトノシロ）では、字民（アザミン）の無病息災と安全祈願の「獅子祭」が、毎年旧暦の7月16日、旧盆の翌日に、獅子と弥勒（ミロク）の本家の新城（アラシロ）家にて、地域の古老や獅子保存会のメンバーにて厳かに執り行われます。夕刻の5時をまわった頃、3人の神司によって拝みが始まり、獅子と弥勒の神様に対して、これまでの字民に対する無病息災と安全を感謝し、向こう1年間の字民の健康祈願を独特の米（オコメ）で行います。参加者全員で神酒をいただいた後、無蔵念仏節（ムソウネンブツシ）を皮切りに全員で奉納唄を歌い、最後は弥勒節（ミロクブシ）で獅子祭の儀式を終えます。獅子責任者が、神司とともに獅子にこれから獅子舞を行うことを報告し、雄獅子と雌獅子の獅子頭（シシガシラ）を祭壇より2人の補佐役に手渡します。そして、獅子保存会のメンバーが皮にとりつけ、午後8時を過ぎて暗くなったところで、登野城村（トノシロムラ）の獅子舞が始まります。獅子舞は、笛の奏者によるドラで始まり、4人のカンター棒が雄をおびき出し、つづいて雌も出てきて神様に参拝します。その後、勇壮な野生の生き方を表現し、最後に身体に何らかの痛みや傷、悩みのある者や小さな子どもたちは、健康で健やかに育ってほしいという願いから、獅子にその部分や頭を咬んでもらい、邪気払いを行います。



沖縄県 南城市（旧知念村） 久高島の年中行事

久高島は琉球王国（リュウキュウオウコク）時代に「五穀発祥（ゴコクハッシュョウ）の地」「神の島」と位置づけられていました。島の女性たちは神役として琉球王府に直接仕える機会も多く、このような生活の背景と琉球開闢（カイビヤク）の聖地であるという誇りが、多くの祭りを残してきました。島全体で行う行事は年間で30数回もあり、全国的に祭りの形が変わりつつある現在、久高島の人々は先祖から受けついできた行事を守っていきこうと必死です。島の祭りはすべて旧暦で、収穫祭・健康祈願・大量祈願など、年間を通して行われます。祀（マツ）りの場所は、御嶽（ウタキ）や泉（ガー）、殿（トゥン）などで、いつでも掃き清められ、聖地としての威厳が保たれています。